

オンナの健活

Vol.2

乳がんは珍しい病気ではありません 早期発見が可能なのは画像診断だけ

今、乳がんで苦しい思いをする女性は10人に1人になり、かつ増えつつあります。乳がんは早期発見できれば治すことのできる病気です。検診はそのために不可欠です。

このドクターに聞きました



対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座 理事長

対馬 ルリ子先生

産婦人科医師 / 医学博士

1984年弘前大学医学部卒業、東京大学医学部産婦人科、都立墨東病院周産期センター医長を経て2002年ウイメンズ・ウェルネス銀座クリニック(現 対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座)を開業。以来、女性のための総合医療(女性用ドックや検診、健康医療相談、産婦人科、乳腺科、内科、泌尿器科、皮膚科などのヘルスケアチームによる医療)を実践している。2003年に女性の心と体、社会とのかかわりを総合的にとらえ女性の生涯健康を支援するNPO法人女性医療ネットワークを設立、全国約500名の女性医療者とともに、さまざまな情報発信、啓発活動、政策提言等を行っている。

乳がんは全女性のリスク

乳がんは、乳房にできるがんで、多くは母乳を乳頭まで運ぶ乳管の上皮に発生します。原因ははっきりしていませんが、出産や授乳の回数が少ないほどかかりやすいことがわかっています。日本人の10人に1人が罹患するありふれた病気となつた今では、「現代女性の現代病」と言えるかもしれません。いずれにせよ、少産化、晩産化、長寿化が進むなか、30代以降のすべての女性が気をつけたほうがよい病気です。

乳がんになりやすいのは、初経が早く閉経が遅い人、初産年齢が遅い人、閉経後に肥満になった人、家族に乳がんや卵巣がんが多い人などですが、そもそも、初産の平均年齢が30歳以上になり、かつ寿命が世界トップレベルの日本では、「どの女性も乳がんになりやすい」と言えます。さらに、通常痛みなどの自覚症状がないので、早く見つけるには検診しかないのです。

早期発見にはマンモグラフィ

乳がんは、小さいうちに見つけるほど治

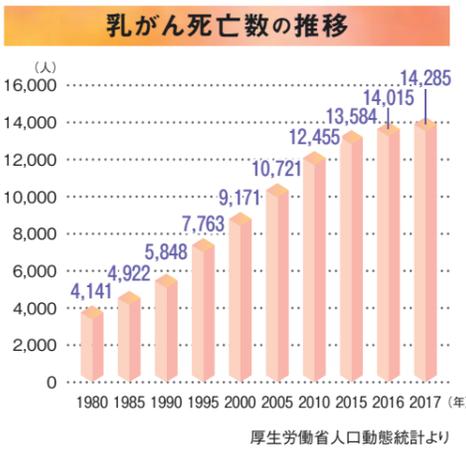
度はマンモグラフィを受け、自分の乳腺が高濃度かどうかを確認しましょう。高濃度乳腺だとわかった人は、超音波検査をメインにします。しかし、年齢が上がるにつれ乳腺が柔らかくなって高濃度が解消してゆくの、50歳以上はやはりマンモグラフィをメインにしたほうがいいでしょう。マンモとエコー同時の「画像診断の組み合わせ」診断が最も見落としが少なくなり、また、1〜2年ごとの「定期的検診」が最も命を救うこととなります。

乳がんの診断、乳がんの治療も年々進歩していきます。しかし、検診が重要であるという事実はずっと変わりません。日本女性も早く「検診を習慣化」したいものですね。

高濃度乳腺の罠

ここでもこの問題があります。

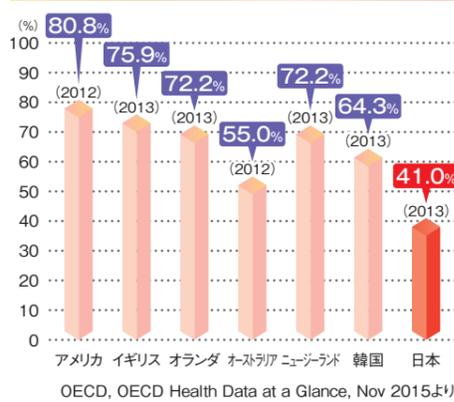
ひとつは、いまだに低迷する乳がん検診率です。日本の乳がん検診受診率は、OECD加盟諸国の70〜80%に対し、40%前後と極めて低い現状があります。乳がんは自覚症状ではなく検診で見つけなければ、早期治療、救命が難しい病気なのですが、身近な病気となった現在においても、検診を受ける習慣がない女性がまだ半数以上もいるわけです。1回の検診では2〜3割の見落としがあることを考えても、せめて2年に1回は検診を受け続けなければ、早期発見は難しいのです。



年の乳がん死亡者数は1万4285人と過去最高です。

次に、高濃度乳腺(デンスブレスト)の問題があります。高濃度乳腺とは、字のとおり、乳腺の密度が濃い、あるいは密度にムラが生まれる状態です。こういった人は、レントゲンで乳房が真っ白に写ってしまつて、見つけたい早期乳がんの所見、微細石灰化がわかりづらくなつてしまいます。その場合、超音波検査(エコー)を追加し、乳がんの有無や広がり調べたほうがよいのですが、高濃度乳腺の情報本人に伝わらないことが問題になっています。実は、高濃度乳腺の女性は、日本女性の半数以上とも言われているのです。

OECDの乳がん検診率の比較(50〜69歳)



がん検診の重要度は特に40代〜60代に大きい

可能な限り、30代前半までのうちに一



健診案内の送付依頼、健診の予約に関するお問合せ先

(株)LSIメディエンス(委託先)

0120-507-066

平日9時〜17時30分

※時間帯によってはお電話のつながりにくい場合があります。予めご了承ください。



ホンダ健康保険組合のホームページでは、(2019年度 健康診断のご案内)冊子のPDFを掲載しています。また、冊子発行後に決定した貸切健診の日程なども今後掲載していく予定です。まだ今年度の健診予約をされていない方は、ぜひ早めにお申し込みください。

癒率が高く、乳管内とどまる状態であれば(超早期)、治療率はほぼ100%です。がんは数年から10年の間に少しずつ大きくなり、最後には自分でもわかるほどの数cm大になり、リンパが腫れたり転移したりします。早期乳がんは、触診でも、血液検査でも見つけられません。転移する前に、まだ数ミリのうちに乳がんを見つけるには、画像診断しかありません。

画像診断には、超音波検査とマンモグラフィ(乳房X線写真)、MRIなどがありますが、なんとといっても乳がんの早期発見に役立つというエビデンス(科学的根拠)があり、世界的に信頼されている方法はマンモグラフィです。検査方法は、乳房を基板で挟み、レントゲンで乳腺全体を写します。超音波検査(エコー)は、ゼリーをつけて乳房を画像でリアルタイムに映す検査です。痛みもなく簡単にしこりを発見することができますが、実は早期乳がんの所見である微細石灰化を見つけないのは難しく、まだ正式には乳がんを早期発見し死亡率を下げる検診方法としては認められていません。

欧米各国では、マンモグラフィ検診の普及によって、乳がん患者は減らせなくても死亡率を減らすことには成功しました。日本でも、乳がんで亡くなる人が早くいなくなつてほしいと願っています。現在女性のがんのなかで罹患率トップの乳がんはまだ死亡者が増え続けており、2017